



### 研究開発公開研究会

「事物認識とその表現形成の徹底化を通して独創的で『ねばり強い』思考能力を育成する」

— 幼・小・中等15年間にわたる教育課程の研究開発 — 第2年次 開催報告

研究開発統括委員会

2007年11月10日に、北海道から沖縄まで全国から約180名の参会者をお迎えし、附属3校園共同の文部科学省研究開発学校公開研究会を開催致しました。

午前中は学習公開と保育公開を行いました。小学校会場では全クラスの朝の会と自由研究発表の様子を公開しました。本研究開発では、カリキュラム編成のキーコンセプトを「自由選択活動」として設定していますが、その典型的な取り組みとしての学習公開となりました。子どもが自ら見出して研究を深めたテーマの発表に学級で耳を傾け、その後に展開される質疑応答・・・「おたずね」・・・の活発なやりとり、また、そこから学習がより深まっていく様子は参会の先生方からも高い評価をいただきました。幼稚園会場での公開保育は、本研究開発における事物認識発達仮説の「もの好き」ステージに沿った提案として、季節感のある「落ち葉」「どんぐり」を素材に用いた活動などを行いました。子ども達の普段と変わらない生き生きとした姿が、とても印象的でした。「校種間連携活動」では、中等教育学校2年生の登場です。5年生との「おたずね広場」では、中等2年生の工夫を凝らした発表に、普段はあまり体験できないリラックスした学習の深まりを5年生が体験し、6年生の自由研究発表に参加した中等生はその深められた研究にはじき返されたりと、異校種間ならではの学習の様子を公開することができました。また、幼稚園5歳児と小学校4年生の交流では、小学生のあたたかいまなざしのもと、5歳児の小学生へのあこがれを引き出すことができました。

午後からは全体会と講演会を行いました。全体会では、研究開発概要の紹介の後、「15年間の育ちを生かしたカリキュラム開発」と題したフォーラムを行いました。幼稚園の松田、小学校の谷岡、阪本、中等教育学校の荒木が登壇し、本学文学部の天ヶ瀬正博先生の司会のもと、子ども達の「独創的でねばり強い思考能力」を育成するのに、どのように幼小中等の15年間が繋がっていくのかについて、当日の公開学習の意味づけを中心に公開議論を行いました。議論は



各校園で育つ子ども達の様々な場面に及び、少し広がってしまいましたが、全体講評の無藤隆先生(白梅学園大学長・本研究開発運営指導委員)に、「幼稚園では総合的な体験。小学校では物事の記述。中等教育段階では、物事の背景にある構造へと思考は進んでいく。」とのまとめをいただき、今後の研究を進めていく上での大きな指針となりました。

全体会の後、奈須正裕先生(上智大学人間科学部教授・本研究開発運営指導委員)に「独創的で『ねばり強い』思考能力と確かな学力」と題して講演をいただきました。「幼小連携」について、幼小のなめらかな連携は「異質なものをやわらかく接続する」ことであり、ここにかかわる大人の「まなざし」のあり方の重要性を、また、「ねばり強い思考能力」について、「対象と自分とのかかわり」の重要性、「他人事」ではなく「自分事」になることによって、思考が深まっていくことを示して頂きました。時に会場から笑いも起こるユーモアいっぱいのご講演に、参会者一同これからの研究に向けての方向性と活力をいただいたように感じました。

当日は、附属3校園で行う初めての大規模な研究会でしたが、参会の皆様にはこれまでの成果を見て頂くことができ、また、様々な方からのご指導により、私たちはこれからの課題を確認することができました。たいへん実りある一日であったと感謝しております。

(文責 荒木ユミ 附属中等教育学校)

平成17年度に文部科学省から「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」の指定を受けて、本年度は3年目になります。そこで、毎年実施している公開研究会を、SSHカリキュラムの実践およびその成果と課題を報告する研究会とし、全教科対象で開催することになりました。

本校のSSH研究の特徴として次があげられます。

- ①文系・理系に偏らない基礎学力を重視する
- ②中高6年一貫教育校の特色を活かして前期課程(中学校)も参加する
- ③理数が得意な生徒を3年以降から徐々に絞り込んで、大学と連携して力を伸ばしていく
- ④身の回りに興味を持つことで、サイエンスする心を養う「生活科学的素養」を育成する

以上のことを、SSH研究の実践過程として公開研究会で示すことにしました。さらに、サイエンス研究会を中心とする生徒の研究活動の紹介と、生徒たちの学びや育ちを明らかにしたいと考えました。このような経緯により、次の内容で公開研究会を実施しました。

### ■テーマ

「SSHカリキュラムの実践と成果～広い視野と素養を備えた生徒の育成をめざして～」

### ■日程と内容

11月22日(木)

全体会(SSH概要と実践報告)、生徒による発表(全国SSH生徒研究発表会での内容紹介と教師と生徒による討論会)、生徒のポスター発表、講演会(講師：上野健爾氏(京都大学教授、SSH運営指導委員))

11月23日(金・祝)

研究概要説明(授業に向けてリテラシーの説明)、研究授業および研究協議(数学科、理科、生活科学、科学と技術、国語科、社会科)

第1日目は、生徒が本年度全国SSH生徒研究発表会で文部科学大臣奨励賞(最優秀賞)を受賞した研究内容をプレゼンテーションしました。その後、SSHを契機に作られたサイエンス研究会の生徒と本校教員による公開討論会を実施し、生徒はSSHに関わって、どのように考えているのか。教師の思いはどのようなものなのかを討論しました。



生徒と教員の  
討論会

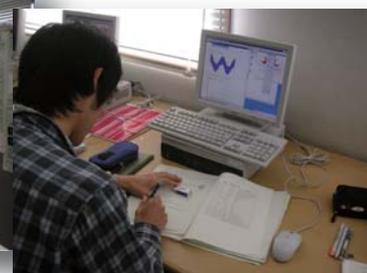
また、本校SSH運営指導委員でもある上野健爾氏により「広い視野と素養を備えた生徒とは－SSHでできること－」と題して講演していただきました。本校のSSH評価だけではなく、広い視野と素養とは何か、生徒の学びとは何かを質疑も含めて語っていただきました。

第2日目は、公開授業とその研究協議を中心に実施しました。カリキュラムの具体化としての授業を見ていただき、研究協議を実施しました。公開授業の概要は次の通りです(記述は、教科「科目名」(対象生徒)「テーマ」)。

1. 数学科「数理科学」(6年選択者)「波を解析する－フーリエ解析とテクノロジーを活用して－」
2. 理科「生命科学」(4年B組)「課題研究入門－DNA抽出－」
3. 生活科学「科学と技術」(4年選択者)「サイエンスカフェ－21世紀のエネルギー問題－」
4. 生活科学「生活科学」(5年代表クラス)「RPE(主観的運動強度)の信頼性を問う－「しんどい」を科学的に捉える－」
5. 国語科「国語総合」(3年B組)「見えない書き手と対話する生徒たち－国語・NIE・メディアリテラシー－」
6. 社会科「文化と社会」(5年選択者)「映像編集をめぐる対話－読売テレビとの連携に基づくメディアリテラシー教育の実践－」



ポスターセッション



数理科学



科学と技術



生命科学

本年度の公開研究会は、SSH成果発表として学校全体での取り組み、およびSSHカリキュラムにおける生徒の育ちを見ていただきました。この2日間を通していろいろな議論ができ、SSH4年目に向けての次なる課題が明らかになりました。

今年度も食教育推進フォーラムが平成19年8月24日(火)に本学に於いて開催され、全国各地から教員、学校給食関係者、子どもの保護者など約600名が参加しました。全体会(講堂)では、文部科学省スポーツ・青少年局の井上健康教育企画室長と丸谷相愛大学教授による講演が行われました。その後、5分科会(総合研究棟)に分かれ、テーマ毎に講演や模擬授業、質疑応答などが行われました。昨年度は附属小学校5年生の公開授業がありましたが、今年度は『食のはぐくみ研究所』の渡邊正雄先生による模擬授業「親子で楽しむ食の育み」が、附属幼稚園5歳児親子対象で行われました。



生活環境学部の教員、幼稚園教員、渡邊正雄先生とそのスタッフを中心に準備を進め、当日は兄弟姉妹の預かりシステムも整備された中で、20名の5歳児とその保護者が楽しくておいしい2時間を過ごすことができました。紙芝居、お箸の持ち方の歌を交えたゲーム、パズルやカードの遊びの後、「火も水も使わないお菓子作り(すはま)」に取り組みました。材料を袋に入れて十分にこねてから、ソラマメ、ハート、ウサギなどの形にして、試食しました。渡邊先生は終始笑顔でやさしく、食生活の心につながるお話をしながら、授業をされました。「食べる前においしそう、一口食べた時においしい、食べ終わった時においしかったと、おいしいを3回いえば次のごはんはもっとおいしくなりますよ」という言葉は、園児と保護者はもちろん、父親も含めた分科会の参加者全員の心に残りました。

食教育推進フォーラムのおかげで、附属幼稚園は「食」にしばった保護者の啓蒙に努めています。伊達ちぐさ教授、的場輝佳名誉教授による子育て講座も開催しました。小さい子どもの時から「食」をおろそかにしないことは大切なことです。今後も生活環境学部や関係諸機関と連携して「食教育」を推進していきたいと思えます。

## 附属幼稚園TOPICS 「えーっ！ たったのこれだけなの？」

今年度の5歳児は「お米」に始まり「お米」で終わったという程、「お米」から学ぶことの多い1年を過ごしています。5歳児クラスの中の農作業に詳しい保護者の方を中心に、本園の園芸部のお母さん達が協力してくださったおかげで、「稲の苗植え」から生長を楽しみながらお米を「収穫」し「味わう」経験をすることができました。また、収穫後の藁は、ちょうど友達と一緒に作っていたライオンのたてがみにもなりました。夏季休業中の稲の世話は、保護者の方もこまめに担当してくださいました。細長い草が稲として変身していく姿や、水槽の田んぼの中の小さな命のサイクルに感動しながら稲刈りの日を迎え、脱穀も経験しました。すりこぎやソフトボールなどを使って思い思いに脱穀をしましたが、あんなにたくさんの稲穂が、脱穀するとあまりにも少ないお米にしかならなかったことに子ども達全員が度肝を抜かれたようで、「たったのこれだけーっ」と叫びました。芝生に落ちたお米の一粒一粒を大事に拾っている子どもの姿を見て、貴重な活動を提供できたことに教師として満足しました。

11月中旬に附属小学校から借りてきたガラス鍋でご飯を炊き、おにぎりパーティをしました。附属小学校3年生による「お米」の話も聞くこと

ができました。また、この日は研究開発の文部科学省からの実地調査日と重なりましたので、篠原孝子調査官にも試食していただきました。自分で握ったおにぎり(少し甘味と塩味があって、暖かい感触のおにぎり)を味わい、ご飯がどうやって炊けるのかもわかった一日になりました。

保護者と教師の連携、幼稚園と小学校との連携の下に、このような子どもの五感に訴える活動を選び、やり遂げた担任の先生たちに心からエールを送りたい、そして、多大な援助を惜しまなかったお母さんたちに感謝の念を伝えたい、そういう保育でした。



## 附属小学校TOPICS 「なかよし音楽会」

「生駒おろしを背に受けて時計台はそそり立つ 学びの庭に夢乗せて・・・」音楽会の歌の合唱で、『なかよし音楽会』の幕が上がりました。11月30日(金)は、例年になく暖かい日差しが体育館に差し込み、館内に子どもたちの素敵な音楽が響き渡りました。1年生から6年生まで全員が集って、合唱と合奏の発表が繰り広げられました。「一人ひとりが今までの練習の成果を出して、心に残るくいのない音楽会にしよう」というめあてを持って、頑張って発表をしました。今年は、曲目が一新して、1年生の童謡メドレーや3年生のわらべ歌などに、子どもたちの個性や工夫が音楽の中に多く見つけられました。みんなで力を合わせて一生懸命な表現が伝わってくる低学年の合唱や合奏、学級集団で創りあげた音楽的表現を堂々と発表する高学年の演奏、本当に心打たれる音楽を鑑賞させていただきました。1年に1度の素敵な『なかよし音楽会』は、一人ひとりの子どもの真剣な音楽への取り組みから、一人ひとりの子どもの感性を高め、聴く人に大きな感動を与えてくれました。また、1年間練習してきた育友会

コーラスのお母さん方の歌声も、迫力があり、大人の音楽の魅力を聴かせてくれました。そして、最後に「奈良の子ども」を全員で合唱をして、心温まる『なかよし音楽会』の幕が下りました。最後の音楽会であった6年生の演奏がいつまでも心に残りました。



## 附属中等教育学校TOPICS 「国際理解教育奨励賞『馬場賞』を受賞！」

附属中等教育学校が1997年より行っている国際交流プロジェクト「グローバルクラスルーム(GC)」の取り組みが、平成19年度第18回国際理解教育奨励賞「馬場賞」を受賞しました。

GCとは、本校が5カ国(英国、スウェーデン、ドイツ、チェコ、南アフリカ)と結んでいるパートナーシップで、主な活動は年次大会(毎年6月～7月に開催)、留学制度、ビデオ会議システムを利用した協同授業です。GCは、その場限りの「交流ごっこ」ととどまらず、日常的な交流を重ね、生徒中心の交流事業にすることを目標としています。

年次大会のテーマは前年の大会で決定され、4～5年生の英語の授業では、テーマを中心にシラバスを立て、生徒中心のコミュニケーション型授業を実践しています。年次大会へは11名の5年生が参加しますが、そのうち1名はスチューデントコーディネータとして1ヶ月前から現地に入り、

大会の企画・運営にも参加します。参加生徒は自分たちだけのイベントとしてではなく、1年間かけて学年全体で取り組んできた成果を代表として発表します。また、帰国してから、大会で学んだことを全校集会や学園祭等の機会に生徒、保護者、卒業生に伝え、参加生徒が運営するWebでも大会の報告がされ、議論が継続されます。

GCの活動が学校全体の取り組みとして有意義に機能している背景には、本校のユニークなカリキュラムがあります。各教科が「地球市民」を育てることを目標に、学習者中心の授業を構成しています。特に4年の総合学習「世界学」では、異文化理解の素地作りとリサーチ、プレゼンテーション能力の向上を図っています。

本校は2006年度、ユネスコ協同学校に加盟しました。ユネスコの提唱するESD(Education for Sustainable Development)は、これまで本校が進めてきた教育の理念に沿うものであり、今後も推進していきます。そして、GCのノウハウを生かし、アジア・太平洋地域を中心とする新たなネットワークを構築しようと考えています。



奈良女子大学附属学校園 Newsletter 06

2008年1月発行

奈良女子大学附属学校部

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

TEL.0742-20-3938

Web <http://www.nara-wu.ac.jp/fuzoku/>